

枕草子『九月ばかり』 定期テスト対策問題 | 現代語訳・文法・内容の頻出設問と解答 解答・解説

問1 読み「ながつき」。「ばかり」＝「～ごろ」（おおよその時を表す）。陰暦九月は現在の十月ごろにあたる、晩秋の場面である。

問2 読み「よひとよ」・意味「一晩中」。対義語に「日一日（ひひとひ）」がある。

問3 基本形「つ」・完了・連体形。下に体言「雨」が続いているため連体形「つる」となっている（「つ」は連用形「明かし」に接続）。「一晩中降り通した雨」の意。

問4 つとめて。「夜が明けて間もない早朝」、特に何かがあった夜の翌朝を指して使われる重要語（『春はあけぼの』の「冬はつとめて」でも頻出）。

問5 「くつきりと鮮やかに・きわだって」。雨上がりの朝日がひととき鮮明に差し出たようす。

問6 読み「せんざい」・意味「庭先の植え込み（庭に植えた草木）」。

問7 「（露が）こぼれ落ちそうなほど」。この「ばかり」は程度（～ほど・～くらい）を表す副助詞。

問8 「をかし」＝趣がある・風情がある。違い：「をかし」は対象を明るく知的に面白がり、賞美する趣。「あはれなり」はしみじみと心の底に染みとおるような感動。『枕草子』は「をかし」の文学、『源氏物語』は「あはれ」の文学と対比される。

問9 読み「すいがいのらもん」。「透垣」＝板や竹の間を透かして（すき間をあけて）作った垣根。「羅文」＝透垣の上に、細い木や竹をひし形に組んで付けた飾り。

問10 もとの形＝「搔き」で、イ音便。「（蜘蛛が）かけ渡した（張った）蜘蛛の巣」。破れ残った巣に雨粒がかかっている場面である。

問11 係助詞「こそ」、結びは形容詞「をかし」の已然形「をかしけれ」。「こそ」の結びは已然形になる。

問12 「（蜘蛛の巣に雨粒がかかっているのが）白い玉を糸で貫き通してあるようなのは、たいそうしみじみとして趣深い。」雨粒を真珠の玉に、巣の糸を玉を貫く糸に見立てている。

問13 もとの形＝「いみじく」で、ウ音便。意味は「たいそう・はなはだしく」（程度のはなはだしさを表し、よい意味にも悪い意味にも使う）。

問14 白い玉（真珠）を糸で貫き通したものにたとえている。「やうなり」＝比況の助動詞（～のようだ）。

問15 「たけ」＝（日が）高くなる（動詞「たく（長く・闌く）」）。「ぬれ」＝完了の助動詞「ぬ」の已然形で、接続助詞「ば」が付いて確定条件（～すると・～したので）を表す。「少し日が高くなると」の意。

問16 「げ」＝「いかにも～そうな様子」の意を添える接尾語。一晩中降った雨の露（雨粒）をたくさん帯びてしまっているため、萩の枝がいかにも重そうに見える。

問17 基本形「ず」・打消・連体形。下に助詞「に」が続く位置で、「誰も手を触れないのに」と打消の意味になることが根拠（完了の「ぬ」なら終止形で文が切れるはずであり、また完了では文意が通らない）。

問18 「誰も手を触れていないのに、（枝が）さっと上の方へはね上がったのも（たいそう趣深い）。」

問19 枝をしならせていた露（雨粒）が落ちて、その分だけ枝が軽くなり、ひとりで元へはね戻るから。誰も触れていないのに枝が動く意外さを、作者は面白がっている。

問20 「じ」＝打消推量の助動詞（～ないだろう）。「つゆ」は下に打消の語を伴って「少しも（～ない）」の意を表す呼応（陳述）の副詞。訳「（私の言ったことなどは）他人の心には少しも面白くないだろう。」

問21 係助詞「こそ」、結びは形容詞「をかし」の已然形「をかしけれ」。

問22 ここまで作者が「いとをかし」「いみじうあはれにをかしけれ」「いみじうをかし」と言い立ててきた、雨上がりの朝の露・蜘蛛の巣の雨粒・萩の枝のはね上がりについての一連の感想。

問23 作者＝清少納言／仕えた人物＝中宮定子（一条天皇の中宮）／成立＝平安時代中期／ジャンル＝随筆。三大随筆の残り二つは『方丈記』（鴨長明）と『徒然草』（兼好法師）。